学校支援の取組事例

「杉並区立杉並第一小学校」の学校支援の取組について

「学校支援本部」と連携した新たな「土曜授業」のはじまり

杉並第一小学校では、平成１９年度に学校支援本部＜杉一プラン＞が立ち上がり、学校・地域・保護者が一体となり、地域社会の教育力を学校の教育活動に積極的に生かす取組を行っています。

学校支援の内容として、授業開始前の朝の時間に地域住民が計算チャレンジや百人一首を指導する「朝先生」や「中学生になってこまらない英語教室」「漢字検定」「日本語検定」など、コーディネーターが学校との調整を行いながら、日常的に地域と連携した様々な取組がされています。

また、杉並区教育委員会では、地域に開かれた学校づくりの取組を一層推進していくために、平成２６年度から「土曜授業」を開始しました。杉並区の「土曜授業」の方針として、学校支援本部や地域の方々の協力を得ながら「『かかわり』と『つながり』を重視した教育」や「各学校の課題を解決するための教育」という二つの観点を掲げています。

杉並第一小学校（杉一小）では、平成２５年度から試行的に「土曜授業」を開始し、平成２６年度から本格的に実施しています。

今回は、杉一小の取組について、校長の鈴木知徳さんと学校教育コーディネーターの伴野博美さん（注１）に伺った内容をご紹介します。

●杉一小の「土曜授業」について

―どのような方針で「土曜授業」を考えていますか？

［鈴木校長］　本校では、学校支援本部と連携で実施しつつ、どちらかというと授業時数確保という意味で通常の授業を土曜日に行い、公開するというかたちをとってきたのですが、平成２６年度からは、杉並区の方針に沿った授業展開するということで、次の三つの観点から実施することにしました。

①日ごろ学んだことを生かすような学習

②本物にふれるような体験的な学習

③「かかわり・つながり」を重視した学習

毎月１回程度（年１１回程度）の予定で実施していますが、そのうち３回ぐらいは、これまで土曜授業として行ってきた「道徳授業地区公開講座」「セーフティ教室」などで、残りの８回～９回程度を外部人材と連携した学習として実施しています。

また、大人のちょっとした学びの場である「ちょこ学」も土曜学校公開に合わせて開催しています。

●企業等外部人材と連携した「土曜授業」の状況について

―どのような授業を行っていますか？―

［伴野さん］　例えば、６年生の算数の授業では、塾の先生に協力いただいて、２進法のカードを使った数字遊びのような手法を取り入れました。コンピューター（デジタル）の世界との関係性を学び、２進法に興味を持たせることで、通常の授業の中に数字の面白さを発見してもらうことにもつながるようなとても充実した授業になりました。２年生の算数（おもしろ算数）ではカレンダーなど数字の規則性に気づかせる内容で行いました。

また、国語の授業では、劇団四季の方に「美しい日本語教室」（５年生）の支援をしていただきました。一方で「外国語活動［レッツスタート English］」（１年生、６年生）も実施しているため、両方の授業を通して「日本語は母音」を大事にし、「英語は子音」を大事にするということがよくわかるようになります。

おもしろ算数（２年生）

レッツスタート English（１年生）

レッツスタート English（６年生）

１年生の授業「親子でなかよく」では、エンカウンター（カウンセリングの一形態）の専門家を招いてワークショップを行っています。子供とその保護者（あるいは違う保護者）が組んで遊び（ゲーム）を行う中で、「他のお子さんを見ることを通して、その先に自分の子供を見る」という意味も含めて実施しました。この授業に保護者も参加することで、いろいろな子供の様子がわかり、理解も深まってくるという効果が生じてます。

そして、図工の授業では、認定ＮＰＯ法人ＡＲＤＡに協力していただき、感じたことを自由に話しながら対話による美術鑑賞教育プログラム（４年生）を行いました。

さらに、野村総合研究所や女子美術大学、東京証券取引所の協力を得て行っている「起業家体験」（B-tan[Ｂ級反物］による商品開発等）のプログラム（５年生）では、商品開発から販売まで行うことで、物を作ることや売ることの大変さとやりがいなど、通常の授業だけでは経験できないことを学ぶことができます。

鑑賞教室（４年生）

一外部人材のプログラム導入の際に心がけていることや導入の意義は？

［伴野さん］　企業等外部の方と連携する際は、ただ単に授業をすればいいということではなくて、事前に何回も担任の先生と協議をしていただいています。個々の授業に適したプログラムの導入を検討し、「こういうかたちでやっていこう」と合意を形成しつつ授業を組んでいます。

学校の年間計画や将来計画の中で筋道を立てて、企業等のプログラムの立ち位置を確認します。その意図が伝われば外部の団体としても何が自分たちに求められているのかを学ぶことがあるし、企業のプログラム自体を見直すようなきっかけにもなります。現に、そういう意識の変化が起こった企業担当者の方もいらっしゃいます。

今までの学校支援本部の取組に加えて、今後、土曜日の取組としてより外部の方が関わることで、子供だけでなく地域の大人にとっても相乗効果が生まれて、教育活動の充実につながっていくと感じています。

●土曜授業の意義や効果について

一土曜日に授業を実施する意義はどのようにとらえていますか？

［伴野さん］　土曜日を使う意味として、平日は働いていて学校に来づらい保護者や地域の方などを含めて、様々な大人が授業を参観しながら「こういう授業をやっているのか」と感じてほしいし、家庭にもその学びを生かしてもらえるとよいと思っています。土曜日だからこそできることだと思います。

［鈴木校長］　先生側としても普段とは異なる保護者の姿を発見できたり、外部の専門家の指導を見ることによって、自らも学ぶことができたりするよい機会となっています。

一土曜授業を通して子供たちへどのような効果が生まれると感じていますか？

［鈴木校長］　地域のいろいろな方が学校に入る中で、「人の話を聞いたり、聞いたことに答えたりする」を経験させることで、子供たちの人から学ぶ姿勢や、人と関わる態度がすごく育てられているという気がします。

［伴野さん］　子供の知識力ももちろん必要ですが、生きる力というか、その時々の対処の仕方をわかっていることも子供の学びの中には必要だと思います。

杉一小では、土曜授業の中で子供たちにいろいろなことを教えるとともに、保護者の方にも我が子以外の子供を通して自分の子供が見えるようになってほしい。

家庭も一緒になって学びつつ、子供の学力にもつなげていけたらいいと思います。

今回の取材で、鈴木校長や伴野さんから伺った話を通して、杉一小では、企業等による様々なプログラムを効果的に導入して、学年ごとの教科の内容に応じて段階的に位置付け、１年生から６年生まで総合的に学びが深まるような体系的なプログラムを意識しつつ、土曜ならではの地域との関係づくりに発展させていく工夫がされていると感じました。

（注１）学校支援ボランティア推進協議会事業（学校支援地域本部）の仕組みとして、学校と地域の様々な教育資源（ボランティア）をつなぐ調整役としてコーディネーターを配置しています。杉一小では、ＰＴＡ経験者の伴野さんが学校教育コーディネーターとして活動しています。学校の教育方針や教員のニーズを踏まえて、子供たちへの教育を豊かにするため、学習支援への企画・協力など様々な教育支援活動に尽力されています。

起業家体験（５年生）

親子でなかよく（１年生）